で，病理学的には心筋細胞の肥大が主要な要因であると考えられた．

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は，多胎児の予後不良因子としての1絨毛膜性2羊膜性双胎に発生する双胎間輸血症候群（TTTS）において，受血児における心筋肥厚の病理発生に関して形態学的に解析し，臨床病理学的意義を明らかにしたものである．

受血児の心重量は対象群の心重量を上回り，有意に心筋壁肥厚を認めた．組織学的には左室，右室ともに対象群に比して心筋細胞径が大きく，かつ，単位面積あたりの細胞数が少ないことから，心筋細胞の肥大が主要な要因と考えられた．その心肥大には心内膜線維弾性症を伴うなど受血児の胎内での高血圧や後負荷過剰状態を反映した特徴を有し，これまで肥厚の原因とされてきた間質浮腫や心筋細胞の錯綜配列，心筋細胞内のグリコーゲン沈着は特異的所見とはいえなかった．

今回の結果は，受血児の心筋肥厚の成因と特徴を明らかにしたことで，血管拡張剤の使用など，TTTSに対するより適切な周産期治療の可能性を示唆するもので，学術的価値ある業績と認める．

65

氏名(生年月日)	花井（ハナイ） 豪（コウ）
本籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2552号
学位授与の日付	平成21年2月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**Renal manifestations of metabolic syndrome in type 2 diabetes** **(2型糖尿病患者におけるメタボリックシンドロームと腎症の関連に関する研究)**
主論文公表誌	Diabetes Research and Clinical Practice 第79巻 第2号 318-324頁 2008年
論文審査委員	（主査）教授 岩本 安彦 （副査）教授 新田 孝作，尾崎 眞

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

糖尿病性腎症の病態には不明な点が多く，多岐にわたると推察されている．近年，内臓肥満を病態の基盤とするメタボリックシンドロームが，心血管病および慢性腎臓病の両者に深く関与する可能性が考えられている．しかし，糖尿病患者におけるメタボリックシンドロームおよび内臓肥満と腎症との関連については，これまでほとんど検討されていない．本研究は，日本人2型糖尿病患者において，メタボリックシンドロームおよびその構成因子，とくに内臓肥満と腎症との関連を明らかにすることを目的とした．

〔対象および方法〕

当科通院中の，正常あるいは微量アルブミン尿期の成人2型糖尿病患者1,003名（女性421名，男性582名，年齢62±12歳［平均±標準偏差］）を対象とした．血清クレアチニン（Cr）2.0mg/dl以上の患者は除外した．メタボリックシンドロームの診断は，2005年に提唱された日本人における基準を用いた．腎障害の指標として，尿中アルブミン・クレアチニン比（ACR）および推算糸球体濾過量（eGFR）を用い，微量アルブミン尿およびeGFRの低下をそれぞれ30～299mg/g Crおよび eGFR 60ml/min/1.73m^2 未満と定義した．

〔結果〕

微量アルブミン尿を有する患者の割合は，メタボリックシンドローム合併群で37.3%であり，非合併群19.2%

に比し有意に高率であった（p<0.001）．一方，eGFR 低下患者の割合は，両群間で差を認めなかった（23.8 vs 24.6%，p=0.822）．なお，年齢，性，HbA1C，血圧などで補正しても，同様の結果であった．次に ACR あるいは eGFR を従属変数としたそれぞれの重回帰分析を行ったところ，ウエスト周囲径は ACR と関連する因子として選択されたが（標準化偏回帰係数 0.144, p<0.001），eGFR との関連は認めなかった．微量アルブミン尿あるいは eGFR の低下を従属変数としたそれぞれのロジスティック回帰分析においても，同様の結果であった．

〔結論〕

メタボリックシンドローム，とくにウエスト周囲径の増大が，日本人 2 型糖尿病患者における微量アルブミン尿の病態に関与していることが示唆された．一方，eGFR との関連は認めなかった．

論 文 審 査 の 要 旨

近年，メタボリックシンドロームと腎臓病との関連が注目されている．本研究は，メタボリックシンドロームと腎症との関連を 2 型糖尿病患者を対象に検討したものである．その結果，メタボリックシンドロームの合併群では微量アルブミン尿の頻度が高く，重回帰分析により，ウエスト周囲径（腹囲）が微量アルブミン尿と関連する因子として選択された．内臓脂肪型肥満が日本人糖尿病患者のアルブミン尿の病態に関与することを示した臨床的に重要な研究である．

66

氏名(生年月日)	**小 松 龍**（コ マツ リュウ）
本 籍	
学 位 の 種 類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第 2553 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当（博士の学位論文提出者）
学 位 論 文 題 目	**The intubating laryngeal mask airway facilitates tracheal intubation in the lateral position** **（挿管用ラリンゲルマスクは側臥位の患者の気管内挿管に有用である）**
主 論 文 公 表 誌	Anesthesia and Analgesia　第 98 巻　第 3 号　858–861 頁　2004 年
論 文 審 査 委 員	（主査）教授　尾崎　眞 （副査）教授　川上　順子，髙野加寿恵

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

側臥位手術中の気道トラブルは生命に関わる危機的状況につながりうる．挿管用ラリンゲルマスク（ILMA）は，盲目的に気管内挿管が行える気道確保デバイスであり，患者体位に気管内挿管の難易度が影響されにくいと予測される．本研究は，側臥位における ILMA を介した盲目的挿管が，側臥位での緊急的気道確保に適した方法であるかを評価することを目的としたものである．

〔対象および方法〕

脊椎手術患者（側臥位群 50 名）と，一般手術患者（仰臥位群 50 名）を対象とした．側臥位群では，25 名ずつを右または左下側臥位とし，仰臥位群では全患者を仰臥位として ILMA を挿入し換気を試みた後，ILMA を介して盲目的挿管を行った．ILMA 挿入に要した時間，挿管に要した時間，全挿管時間（ILMA 挿入に要した時間＋挿管に要した時間），挿管成功率を両群で比較した．